

謹呈

昭和二十四年七月二十五日發行(三種月一回・十五日發行)可

(通第一九九号)

わが母のいます国

―手向け草―

近角常観

..... (1)

福島政雄

..... (5)

我が母のいます国

..... (10)

平等の大慈悲

..... (23)

慈光

第十七卷

第十二号

横着心と遠慮心

近角常観

親の慈悲に慣れて、悪しくもよしとおちつけ、横着心なり。我の罪悪を気づかいて、かく悪しくしてはとあといざりをするは遠慮心なり。

横着なるものは、我身の罪悪を自覚せず、遠慮するものは、親心の真実を知らざるなり。しかして罪悪を自覚せざるすのは、親心の真実を知らざるなり。親心の真実を知らざるものは、また罪悪を自覚するを得ざるなり。

何となれば親心の真実は、この罪悪深重の我身一人を救わんとの大悲無限のやる瀬なき思召しなればなり。これすなわち選択の願心なり、如来の清浄真実なり。

故に、我親心を知れり、慈光を被れりといふとも、若し我が罪悪を悲憐したまうやるせなき御心を頂かずんば、いかでか真実の親心を知るといふべき。かくまでやるせなき深き親の真実をいただきてこそ、初めて我身の罪悪の深重なることも思い知らるるなり。久しく親心を痛ましめたまつりしは、畢竟、我一人が煩惱熾盛なるがためたりしを

からざるもの、これこそ、横着心を離れて、親の真実心に感泣したる姿なり。

世の人々の性質に横着風の人と、遠慮風の人とあり。され結局に至れば、横着風人も横着心極りて、遂には遠慮心を起すにいたる。而して遠慮風の人も表面には修養謙遜の態度をあらわすといえども、その結果、実に罪悪を自覚せざるが故に気をもみながら、その立場は畢竟横着心に止まれるを知るべし。たとえ如何なる罪悪でもたすけたまうと安んずるものはこれ横着心なり。もし平生ことなき時は罪悪でもたすかる者と信ずと雖も、一旦事あるときは、必ずや遠慮心を生じ来りて、勿論罪悪でも助けたまうるべけれど、成るべくは罪悪を少くして助からんと励むに至るべし。これ横着風の人も、結局遠慮心に陥る有様なり。而して遂に罪悪を少くし得ざるのみならず、益々罪悪の深さに驚き、遂に益々煩悶におちいるべし。

さてこの我身のあさましさに泣き、人生のはかなきに悲しむといえども、こは煩悶状態にして、罪悪観、無常観とはなづくべからず。この浅間しき者をたすけ、はかなき者を救わんとの大悲広大の御真実をいただきて、この生死無常、罪悪煩惱が気にかゝらぬようになりたる時、真に心の底より、我身は現にこれ罪悪生死の凡夫と自覚すること

慚愧するのほかなきなり。

しかるにこの深広なる親心をいただかず、我身の悪しき程をも思い知らず、唯慈悲を被れりといひ、光明の中といひ、悪人をたすけたまう本願なりといひ、畢竟、これ如何ほど悪しくてもかまわぬという下心にあらざるや。罪を作るも悪を犯すもなおこれ慈悲のうち、光明の懷という、横着心にあらずや。恰も親に心配せしめ、苦勞をかけたる放蕩息子が、なお放蕩をなすつゝ、是慈悲なり、恩寵なりといふが如し。親はもとより放蕩して可なりと許すに非ず、その許すべからざる放蕩をなせばなす程、大悲の矜哀はいやまさるなり、犯すべからざる罪悪を犯すほど親の御心を傷ましめ奉るなり。かくの如く、虚仮不実、汚穢不浄の我等を飽くまで救済せんと誓いたまえる御真実に遇いたてまつり、真心徹到の一念、煩惱の氷解けて菩提の水となり、罪障の雪融けて功德の体となり、胸中の罪惡一時に讖悔の涙となり、八万の煩惱、忽ち口より流れ出て慚愧の情やむべ

を得べきなり。

これ畢竟、悪しき者でも、助くるといえる本願にあらず、悪しきものをこそ助けんとの誓なればなり。この特に悪人を悲憫したまう親心に遇いたてまつりてこそ、常没常流を無有出離之縁の我等、渡りに船を得、闇夜に燈火を得たるが如し。

無明長夜の燈炬なり 智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり 罪障おもしと歎かざれ
ここに始めて遠慮心の根が切れて、罪業深重も浮き上り、気づかいの心解けて、願力無窮の御手に軽々と引きあげられたてまつる。南無阿弥陀仏、々々々々々々々。

されば横着心を離れて我身の罪悪を自覚すると、遠慮心を離れて、大悲の恩寵に感泣すると、いずれも畢竟罪業深重の我身一人のために苦勞したまえる無限大悲の親心を頂くに至りては一つなり。今大悲深広の親心の前に横着心と遠慮心の離れたる実験の披瀝として吾人は左の告白を反覆玩味するを禁せざるなり。

謹啓 慚愧の至り奉感謝候。さて先般御慈誨を蒙るまでは、全く不肖は、如来の光明に包まれ、仏の懷に抱かれ居るものと自覚（五、六年前より）し、この信念は誰が

何と言うても棄てること出来ぬ、否棄てんとして棄てあ
たわざるものと安心いたし居りました。然し今から考
えて見れば、この安心は何だか奥のその奥に多少の雲翳を
認めて居りましたが、不肖はこの多小の不安あるそのま
まに安心して居ればよい、今日目前、現実の動作のすべ
てが、私事私行であるとうぬぼれた実感で消光致して居
りました。

然るに先夜の御慈教により、先生より、未だ親に知らさ
ぬ借金が残留する、とか、同朋に非ず、とか、御示教を
蒙りまして、一時非常に悶煩いたしましたが、翌日、原
様若先生より二三、適切なる御諭を蒙り、今迄不肖の強
情我慢のため、うぬぼれのため、仏恩の廣大無辺なるこ
とを忘れ居ることに氣附かして頂き、大いに慚愧致しま
した。然し其際はまだ大悲の御本願に乗托する心も起り
ませなんだが、其翌朝、突然、平素睦き慣れて居りまし
た、

『善悪共に、汝の計らいは入らぬ、其儘来れ』

の御喚声に氣付かせて頂き、心中何時になくひらけ、電
氣にでも感じたるかの様に愉快を覚ゆるのであります。
而して当時執務しつゝも、何だか自然、歡喜の心が胸一
杯になり、頻りと涙を催すので、人前がありますから、
それを出すまいと力むのも中々苦しい位でありました。

ありと雖も、自ら親を勞せしむる放蕩息子たることを自覚
せざるものは、親の眞実を頂かざるものなり。聖人は如来
より賜りたる信心が同一なればこそ、御同朋とこそ仰せら
れ、未だ親の眞実に目を醒まさずして、一切衆生光明中
にあるが故に御同朋というといえども、予は御同朋とは認め
ざるなり。もとより一切の衆生、大悲の親より憐み給うは
平等なりといえども、衆生にしてその大悲に醒めずんば未
だ兄弟の名のりをなさざるが故なり。さればこそ同一念仏
無別道べつのみつなきがゆえに故の同じ御親の慈悲に帰命してこそ、四海の
人、皆兄弟とこそ申すべき、君たとい御同朋なりとい
うも、我は君がこの御親の眞実を頂かざる限りは、御同朋に
非ずと警告したりしなり。

且つ曰く。かくの如き立場にありて、強いて自ら放蕩の
子なりと覚悟せんか、その下心は、たとい放蕩をなすとい
えども親はすてざるなり。たとい如何程借金ありといえど
も、親は引受けくるるなりと。結局横着心に腹をすえ、罪
悪ありてもよし、借金ありても引受けて下さるありと腰を
すえたる横着なる放蕩息子の態度なり。この横着心はやが
て必ず遠慮心にならざるを得ず。必ずや心中おもえらく、
如何ほど罪悪ありてもかまわぬ、如何程借金ありても引受
けて下さるならんも、さればとて我心中に潜める罪悪、隠
匿せる借金までも打出すに忍びずと 遠慮心 生ずるなる

丁度今迄の胸中のもやくやしたるものが、歡喜心と入れ
代つた様になり、あまり嬉しき、有難さにて、かえつて
心がソワソワ浮上り、用事もなきに、再三西入寺様へ参
上して、種々御迷惑かけ申してまで益々深く喜ばして頂
きました。実に今迄は御親様の光明を盗み、御慈悲を掠
めて苦しんで居りましたことを懺悔し奉ると共に、御恩
の絶大にしてとても報じがたきことを知らして頂き、何
とも勿体なき次第であります。嗚呼こんな嬉しい、喜ば
しいことはありません。嗚呼この喜びまでが、御親様の
賜りものと氣付かして頂き、何とも彼とも南無阿彌陀仏
々々々々々々々々。

これ人格高き、我が有縁の一紳士が、かつて我と法縁を
結び、仏を信じておもへらく、私は罪惡の衆生を憐みたま
うこと、親の子を愛するが如し、子は親の慈心を知らざる
だけ親はます／＼子を愛するなり、と。

而して其人はその忘恩の子たる地にたつことを忘れて、
知らず識らずの間に、自ら親の地位に立ちて、万事はこれ
私事私行と思いたるなり。故に自己の罪惡を自覚せずして
みだりに一切衆生光明の中にあり、恩寵のうちにより、皆
同朋なり、と自らきめこみて安んじたりしなり。

故に、予これを誨めて曰く。たとい同一大悲の光明中に

べし。君よ、日夜煩悶、罪惡の起る毎に、必ずこの如き心
にてはと、自ら引きさがる心地なきや。これ借金の残留す
るに非ずや。これ親に知らさぬ借金を自ら修養の力をもつ
て自ら償わんとせる遠慮せる態度に非ずや。これすなわち
借金が残留すると警告せしゆえなり。

かくの如く横着心はやがて遠慮心なり。親の眞実を知ら
ずして、如何程、罪惡の借金ありと雖、かまわぬという横
着心は一変して、かまわぬに相違なきも、隠匿せる借金ま
でも委すことは出来ぬは、即ち遠慮心にあらずや。

この横着心も 遠慮心も、畢竟其人の性質、その場合の
心持によりて左右、彼此、いづれにも傾くと雖、畢竟大悲
の親心の眞実を知らざればなり。広大難思の御思召をいた
だかざればなり。

そも／＼如来大悲の本願は、如何なる罪惡でもかまわ
ぬ、借金ありても引受くるという如き緩慢なる態度に非
ず。その大悲の親は表面にあらわれたる罪惡借金に対して
引受くるのとたまに非ず、我等が最も苦しめる内心に潜
める罪惡、隠匿せる借金を知らしめして、大慈大悲の御心
やるせなく、特にその罪惡の借金を引受くべしとの本願な
り。衆のために法藏を開きて選んで功德の宝を与え、特に
隠匿せる罪惡を有せる横着なる放蕩息子、秘密の借金を抱

えたる遠慮せる貧窮の我等のそめに積功累徳したまえるが大悲の真実なり、親心のやる瀬なき心底なり。是即ち罪悪深重の我等をたすけんとの大悲深重の本願に非ずや。我等この大悲の御親心の真心徹到しぬれば、慚愧、懺悔の念やみがたく、横着心の強情我慢の頭折れて、知らず識らずの間、遠慮せる、もやくやする胸中の秘密、奥のその奥にひそめる罪悪借金、大悲の親より引きとられ、歡喜心といれかわり、胸底の借金、齎積せる罪悪がおのずから解け

ルーテルと親鸞

福島政雄

て、円融満足の大慈大悲の功德大宝海水となりたるもの、これ実に信楽開發の一念に非ずや。前記一編の消息、実に貴き実験の告白に非ずや。

釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し
われらが無上の信心を 發起せしめ給いけり

南無阿陀弥仏、々々々々々々。

(求道、七卷、六号)

七、道徳と宗教(その一)

ルーテルが修道院における修行の中心問題は、愛ということであつたようである。隣人を愛するの純粋の愛を以てするといふ問題であつた。然るに愛といふことは人間においては本能の一つであつて、本能としての愛は憎に裏づけられている愛であり、決して純粋のものとは言われない愛はいつでも憎に転ずるといふような頼みにならぬ愛であ

る。

人間の愛は相對愛である。価値あるものを愛するといふ相對愛である。アウグスチヌスは世俗の愛を転じて神を愛する聖愛に純化することを求めたと称せられる。ルーテルは修道院においてこの聖者の歩みの跡を辿ろうとしたのであつたが、それも悲痛な破滅に終つた。神を愛する聖愛といふ境地がたとい到達せられたとしても、それは矢張り心

の幸福のための愛ということになる。幸福を求める愛は純な愛ではない、ルーテルの自省は深刻になつた。手を洗えば洗うほど汚くなるというルーテルの言葉が伝えられている、彼は深刻に愛の純化の不可能なことを体験した。「私自身地獄である」といふ言葉も伝えられている。

すでに愛の純化が不可能であるとすれば、道徳における根本的破滅ということになる。キリスト教においては、神を愛するといふことが道徳の根本である。その愛が結局幸福を求めるための愛といふことで不純なものであれば、道徳は成り立たないことになる。人間として道徳の根本が破れるのである。

ここでルーテルの心境は根本から転じて来る。地獄である我が身は修道院の修行によつてどうにもなるものではない。ここに神の恩寵というものがルーテルに響いて来ることになる。愛する価値のない者を愛したもうといふことが神の恩寵である。ルーテルはこれをパウロによつて気づかせられている。併しどうしてかような神の恩寵が我が身の上に注がれていることがわかるか。自分はただかような神の恩寵に甘えるといふのか。ここにルーテルにおいてはキリストの十字架といふものが非常に大切なものとなる。キリストの十字架は、神の愛が神の怒りに打たれた姿であるといふ。神は愛する価値のない人間を愛する。それは人間

を甘やかすといふことであつてはならない。そこに神の愛は、神の怒りに打たれなければならぬといふ。ルーテルには信仰の世界が開けるのであるが、それはこの痛切なキリストの十字架によつてはじめて可能となる。十字架のキリストがルーテルの生命の根本に觸れて、ルーテルは信仰の上に蘇つて来るのである。それは神に甘えるといふようなことではない。十字架のキリストによつてルーテルは深刻に自分の罪惡のすがたに目醒めるのであり、同時にその罪惡の自分に注がれる神の愛に生きるようになる。これがルーテルの心機一転の内面的風光である。

ここにルーテルと親鸞と通うところがあり、また違ふところがある。親鸞にも「地獄は一定すみかぞかし」といふ自覚がある。併しキリストの十字架のようなものは親鸞にはない。その代りに親鸞には宿業の徹見といふことがある。「そくばくの業を持ちける身」といふ自覚がある。この宿業の自覚といふことは非常な痛切なことであつて、過去久遠劫来の積り積つた自分の業といふものが、今日の自分を絶対絶命の貪瞋二河の河畔に立たしめるといふのである。それは仏陀の心光に照らされた自分の姿であつて、ここに親鸞は痛切な自分のいのちに徹してあくまでも自分をあわれみたまふ仏陀の慈悲を感じるのである。その仏陀は「永遠のまこと」といふべき大生命力である。

八、道徳と宗教（その二）

親鸞においてははやや趣を異にする。自分が道徳の実践において駄目であると自覚するようになった点ではルーターとは通ずる。叡山における修行は真面目であったが、それだけに、識浪が動き、妄念が乱れる自分の姿がはっきりとまったのである。ここに聖徳太子を思慕してその範に倣おうと志したのであるけれども、その俗人生活としての理想もなか／＼に実現出来なかった。越後に配流の後の愚禿の自覚はそのことを物語る。

愚禿の禿というのは涅槃經に用いられている意味から採られたものという。世が末になれど食うことに行きつまた者が食うために寺院に入る、これを禿人というたとある。愚禿親鸞という意味は深刻である。真実の修行も出来ず、俗人の生活に入ってしまった自分が、なお僧侶であるかのように装っている。全く偽善的の生活である。この偽善者という自覚は親鸞の晩年まで続いている。是非知らず、邪正の分別も出来ない身でありながら、名利のために人の師となることを好むという晩年の告白がある。道徳の実践が少しも出来ない身でありながら、恰も賢者であるかのような顔をしている。自分は偽善のかたまりのようなものである。この深刻な自覚が法然門下となつた以後の親鸞の心の

然らば道徳の問題はどうなるのであるか、ルーターは「悔い改め」ということを大切なこととすすめるのであるがそれは自分の罪惡を問ひ糾し、自分が自分を憎むことであるという。自分は立派な人間に生れかわつたということではない。愛の破綻を体験した身として、自分は人類愛に立派に生きていたとは言えないのである。併し神の恩寵に生きるようになったルーターは徹底的に自由の身となる。「キリスト者の自由について」の冒頭で言っているように、信仰の人は万人の主であると共に万人の僕である、ということになる。これは自由の境地である。この自由の境地に入れど、愛はその結果を目指す愛でなくて、全く隣人のための愛となり、何等報いを求めない愛となるという。すなわち道徳の復活である。

義人は信仰によつて生きる。その義人の義は神の義である。十字架を負う義である。敵をも愛するという、その敵は敵ではなくなるのである。愛は「赦し」であるという。その「赦し」はともに神の前に赦されるということである。

犠牲になるという、その犠牲という言葉も改められて、進んで献身するということになる。進んで世のため人のために身を献げる自由の境地に入る。ここにルーターにおける信仰より道徳への道があると思われる。神の義を賜る道徳ということになるのである。

底にある。

教行信証の信の巻に、善導大師の語を引いてあるところは極めて痛切である。善導の言葉の意味では、外に賢善精進の相を現しながら内心には虚仮不実であることを戒めた教訓であるが、親鸞はこれを読みかえて、外に賢善精進の相を現することを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり、と読んである。これは自分の体験からの読みかえてであるが、善導の語を読みかえて不道徳の自分を告白しているのである。

このような偽善者であり不道徳漢である自分は結局どうなるのであるか。親鸞におきてはここに宗教の門がひらけている。それは廻心の門であつて、その門は師法然によつて開かれた。法然によつて仏陀の慈悲が親鸞に徹したのである。弥陀の誓願不思議が親鸞の生命に徹したのである。そこに念仏申さんと思ひ立つ心が起つたのである。弥陀の誓はキリストの十字架とはちがう。それは久遠のまことが善知識とおして衆生の心肝に徹するのである。そこに仏の怒りというようなことはない。仏陀は慈悲と智慧とのはたらきに徹した久遠のまことのいのである。煩惱の衆生をあわれみ、その煩惱のいのちの底を照徹する大心光である、衆生は仏陀の慈悲に融化せられると共に、仏陀の智慧に照徹せられる。親鸞は法然によつて仏法の慈悲に目がさ

め、同時にその智慧に徹底的に照らされる身となつた。罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けたまう仏陀に触れると共に、自分は地獄が一定すみかであるという徹底的自覚に徹した。しかもその当然地獄行きの身が救われているという不思議が体験せられている。ここに道徳と宗教との微妙な契合点がある。

弥陀の本願というのは、釈迦牟尼仏の大覚の最も奥深いところに感ぜられた久遠の慈悲と智慧とであり、人生を買く永遠のまことともいうべきものである。親鸞はこの永遠のまことを善知識によつて感じ、そこに仏陀の廻向として道徳の世界を感じている。廻向というは賜るという意味である。我が身の悪いにつけてもまず／＼願力を仰ぐ、そこに自然のことわりで柔和忍辱の心も出でくべしという自然のことわり、とは自然法爾ともいう、少しの無理もないということである。柔和忍辱の心は自分の道徳の励みでなく、全然仏陀の廻向である。道徳とは仏陀が無理なく衆生に開きたまう仏陀の世界である。

ルーターにおけるキリストの十字架は痛切である。これに対するものを親鸞に求めるならば、煩惱に即して感ぜられる無限の宿業である。暗黒なる宿業の感じは神の怒りが神の愛を打つというようなものではない。自己一人の久遠劫来の積み重ねた業の感じである。それが自分の煩惱の深

刻性に即して感ぜられるのである。しかもその煩惱業に即して永劫の修行に裏づけられた仏陀の慈悲の照徹がある。そくばくの業を持つ親鸞はここに仏陀の救いの生命に触れる。弥陀の御恩の深重なることを感じてほればれと弥陀を仰ぐ、そこに自然に道徳が生れる。

親鸞の晩年の書翰を読めば自然法爾ということが実に微妙に感ぜられる。親鸞は決して自分に道徳を許していない。晩年制作の和讃にも、心は蛇蝎の如くなり、といい、修善も雑毒であると言つて、如何に善を修行するようでも、そこには常に名聞利養の毒をまじえていると告白している。

しかもその告白の中に何とも言えない仏陀の善行が浮び出ている。無慚無愧の身でまことの心 ないけれども、弥陀の廻向の御名であるから、功德は十方に満ちたまうと讃嘆している。そこには信仰の上に開けている不知不識しらずしらずの道徳という趣がある。

自然法爾の事というのは、親鸞の八十六才頃の心境を書いたものようであるが、行者のよからんとも、あしからんともおもわぬを自然と申すと言つてある。ルーテルは神によって与えられる義を力説するが、親鸞は仏陀によって正しさを与えられるとは言わない。正しいとか、正しくないとかいうことを超えて、ただ仏陀の御恩を仰ぐ、そこには恩光を中心とする温かい道徳の世界があるが、親鸞は道

我が母のいます国

或る雨の夕方、外から帰つてみると母が愛猫のミミーをつかまえてなにかいじめているような様子であった。わけを聞いてみるとミミーが外の泥濘ぬかるみを歩いた足でお座敷にあるので、そのたびに雑布でふいてやるのだという。そのためミミー専用の雑布もつくつていいるという。

母は犬や猫を特別可愛がる方だったが、それだけ世話の方も相当なもので、特に犬は繫いでおくのがしのびないとか云つて早くから飼うのをやめた。猫の方もそののち飼うのをあきらめたようだった。

ついでに雑布といえは、母は常に十幾種類のものを用意しておき、茶碗、皿用の布巾だけでも七、八種類の区別をしていたようである。御飯茶碗用、おツユ茶碗用、漬物皿用、ほとけ様用、生臭い皿用など、彼女らしい一流の規定概念に従つて、それらを厳しく使いわけていた。母が病気をした時、第三者例えば仮に私が台所に入って調理の代役でもしようものなら、その秩序紊乱のほどで分類的始末が

徳の世界などということをし少しも言わない。義なきを義とす、と言つて、すべて「はからい」を超越した世界に住している。しかも関東の同行への手紙には、放逸無慚の行を懇ろに戒めてい、念仏をそしる人々をも憎みそしつてはいけなと戒めてい。そこには信の徳による絶対平和の世界が開けている。自然法爾とは、知らず識らず帝の則に従うというような境地であつて、それは信の一念の徹するところを開けてくる晩年の円熟の境地である。これが親鸞における道徳と宗教との契合の極致である。

昭和三十三年六月廿四日、稿。

石、水に浮ぶ

石は水に沈むものじゃとばかり知りて、舟に乗ずれば、いずれの岸へも行くということを知らずば、その石は終に川の向うにやらるまじきなり。

罪を造れど地獄に落つるとばかり知りて、他力をたのめど助かるということをし知らずば、元来重き石の軽くならねば川を渡ることならざる如く、生れついで罪深き身なれば罪軽くなりがたき故に、終に浄土へはまいられまじきなり

惠空語録

川畑愛義

大変であるらしかった。

母はどちらかといえは女には珍らしい合理主義者なのであるが、それが全く彼女独自の流儀で、おかしなくらい他の人達には通ずるものではなかった。奇麗好きの習癖はかなり徹底的のように思われたが、そのうちでも、台所は彼女の金城蕩池きんじょうとうちでもあり、高い清潔性を維持していた。一向に見ばえのしないものばかり、道具や調度などほとんどが近代化されないまま古風な寮囲気を漂わせていた。それにふさわしくないものとしては、まあ瞬間湯沸し器一個ぐらいのものだったろうか。

二

はるかに遠く、母は薩摩の国の山間部の僻村の豪農の長女として生れた。事大性、封建性の強い農村のことでもあり、比較的大きな地主であつたせい、幼少の頃から贅沢と或種の意識を身につけて育つたようである。

生家の土地は一里くらい歩いても続き他人の土地を踏む

ことがないともいわれていたとか、また小さな丘の上に家が
あったので、小丘一家とも呼ばれた。しかしこの贅沢な
いし階級意識の慣習はそれから後の彼女を必要以上に苦惱
させましたし、失意の淵へ追いやる原因となった。

栄養学的にいつて、イワシ、アジ、サバ、サンマなどは
すぐれており、私は好んで賞味したのだが、これらの大衆
魚の類は母からはなか／＼食べさせて貰えなかった。

それからおツユでもみんな飲んではいけないし、出され
たどんな御馳走でも総て食べてしまうことは貧乏人のする
ことだとしてたしなまされた。丹精こめて作られた母の料
理でさえ少しづつ残すのが道理で、みんな食べてしまうの
は、^{お茶碗}料理を食^かべ^て残^さす^のが^道理^で、^{お茶碗}料理を食^かべ^て残^さす^のが^道理^で、みんな食べてしまうのは
母流に考えればナラムン(貧乏人)、またはコマシゴロ(け
ちん坊)のすることであった。このような人生観が父の苦
境時代のように通用しないものであったかは自明の筈な
のに母はついぞそれを改めることができなかった。

三

私のまだ若たった頃、と云っても京大医学部を卒業して
間もない頃、私達は若げの至りの信仰の情熱に燃えて、法
友、西元宗助、宮地廓憲、長谷顕性、加治佐正、川畑愛浩
五百井仁、茶園和男らと共に宗教的な道場ともいうような

ができない。しかしそれほど丹精こめた母の手料理に対し
て私はいまだ感謝の微意をささげたことがなかった。

このたび、母の病気が重くなり、ほとんど茶碗を支える
力が無くなった時、食べ難い料理は私がお茶碗に手をそ
えてやり、時にはスプーンにすくって母に食べさせた。そ
のような時母が「おいしい」と言っておくと胸に
こたえるものがあった。

母の好きな食物は大低田舎風なもので、近代的な病院の
料理はあまり口に合わないようであった。私達は栄養治療
室の桂助教に依頼して特別調理が許されたとき、何より
もホッとした。母の一番の好物は新鮮な近海ものの鯛のお
つくりで、入院してからほとんど毎日、これを市場に注文
して食べてもらうことにした。また鳥取産のカニも好んで
食べてもらった。弱りはたて体力になっても母は好きなも
のは美味しいと云って感謝の言葉をのべてくれた。それか
ら果物ではメロンやマスカットなどであった。

医者には最初から絶望的に云われたが、これらを喜んで
食べる母の顔を見ては、奇蹟をわが母の上にと、祈る心で
一杯だった。そしてそれらが一滴の血となり肉となり、生
命の糧となるように念願もした。幸い孫が東京から車をも
って来てくれたので、母の好きなものを買いだしに出るの
にあまり時間も労力もとらなかつた。

自治寮(それを学道舎と称した)を持っていた。それが当
番制の自炊であったため、料理の下手な者の週間には相当
ひどいめにあった。その頃私の家は大阪市にあって父の仕
事もまずは順当な歩みを続けていた。母はよく子供達につ
いて夢みが悪かつたとか、虫の知らせがあったとか云っ
ては食物や洗濯物を持参して陣中見舞に来てくれた。

それが粗肴粗餐^{そこうそくせん}というより一汁一菜的な寮生達にとつて
とくに調理献立のまずい私の週間などには待望の珍味であ
り、時には千天の慈雨とも思われたとは寮生たちの後日の
語り草である。そこまではよかつたのであるが、西元宗助
さんの追憶談によると、母は時に大きなお菓子を持参し
た。その際円いお菓子をまず四角に切つて、その真ん中を
我子に食べさせ、周囲の端っこをおもむろに他の寮生たち
につまんで与えたので、宗助さんは幾度かもう食つてやる
まいと決心したそうである。また、すぎ焼のときなどは、
母是一片も食べないのはよいとして、うまそうな肉はわが
子の皿の中に取つてやるのだそうだ。初めのうちは腹が立
つたが、後ではみなもあきらめたともいう。このような集
中され過ぎた愛情はその死の寸前まで変りがなかつた。重
篤なベッドの上の苦しい息の中から、口を開けば、私の食
物の注意であり、衣服などに対する心づかいであった。私
に食物を与える時の母の熱心で満足な顔をもた忘れること

四

私たちの切なる願いにもかかわらず、母の病勢は日一日
とつり、体力は益々おちていった、或る日、母は、食べ
たいもの^{もの}を大方食べさせてもらった、鯛のおつくりもよく
食べたね、というから、それでも何か欲しいものはないか
と尋ねると、鹿児島特産のハルコマが食べたいという。そ
れまでに故郷の香りとして、ボンタン飴やカルカン、兵六
餅などは長女の岳父から特送されていた。長女は大阪の名
店街へ急行したが、この田舎菓子だけはさすがに無いとい
う。店頭で落胆する長女の様子に同情した来客の一人が、
丁度鹿児島へ飛行機で趣く途中だというので、鹿児島から
それを買って再び航空便でとどけてくれた。それがイコモ
チと共に母へ間にあつたとき、私たちは何とも云えない感
謝の念にうたれた。これも母が生涯をささげて子供達に食
べさせたいと願う何万分の一にも足りないだろうと思われ
たからである。

五

平常の食物について母は栄養第一を彼女なりの信念(高
い値段が高い栄養価という考え)から押し通したが、^{洗濯}洗
の衛生第一を固く保持したようであった。従つて、肌着で
は純綿、洋服では純毛、サイズは大きく広いものと云うこ
とをモットーとした。従つて恰好やスタイル、流行なんど

ほとんど眼中になかった。私などは中肉中背だと思ふのだが、母の買ってくるものは大でなく、たいてい特大であった。ピッターリ合うものは窮屈として血行を障害し、肩や手足の凝りにもなる原因と盲信していたようであった。実際母の買ってきたものはワイシャツから靴下まで、ダブダブでブクブク、かえって清苦しいのだが、いくら言ってもこの道理は母には通じなかった。また着物は直接肌に着るものとして健康上最も重要なものと考えていたらしく、母の買う子供等の着物は可能な、いや身分不相応の上等なものが多かった。彼女はバーゲンセールとか、大売出しとか……などの特売品は一切買わないのみならず、嫁達にも買わせなかった。母によれば、これらは何所かに欠陥や誤魔化しのあるもので、大切な我が子に着せるべきものでないからである。母の信念はなほだ固いもので、よそから進物として頂いたものでも、お眼鏡にかなわないものは一切子供には着用させなかった。

しかし母は、自分のものとしては新しく着物を買いたい求めるといふようなことはほとんど無かった。嫁入の時には村始まって以来という程の盛装をした彼女ではあったが、彼女が自分の着物を新調したのを見たことがない。或る時私が彼女自身の着物をつくるようにと僅かばかりの小遣をあげたことがある。ところが彼女はその全額で私のためにシ

ヤツを買って来てしまった。今この稿を書きながら着ているのがそれで、ズボン下と対になっている。当時の金で三万円のラクダのシャツである。

母が亡くなって二、三の者が集まり遺品分けをすることになったが、親類に差し上げるようなものはほとんど一枚も無かった。ただ肌着と下着類のようなものは四十枚ばかりもあったという。奇麗好きの母は天気さえよければ毎日のように洗濯をし、清潔感を楽しんでいたのかも知れない。そして同時に着物を更える女のささやかな喜びを肌着類をとり替えることによって僅かに味わっていたのかも知れない。

六 頃

年をとると誰でも早起きになるものだが、母は夏は四時半頃、冬は五時半頃から夜の明けるのを待ちかねて起き出て日の暮れるまで、コマネズミのように働いた。母の日課の重なるものは、掃除と洗濯、調理と買い物、それに繕うい物や庭園の手入れなどであった。

ひねもすの勤勞をこよなく愛し、こよなく楽しんだ母は口癖のように「働けなくなつたら婆婆に用はないんだよ」と言い続けた。

母の作業の能率が上がっていたのかどうか今だに私にはよくわからない。ただマイペースを保ちながら亡くなる一つかりして私の下駄の上を母がまたいでしまったので、下駄を両手で捧げ持ってわびを入れていたところだった。このような風態だから母はどんなに急いでも私達の頭の上の方向を通ることはしなかった。着物を洗う盥でも、物干しでも、すべて男女用は別々であった。

月前まで感謝の仕事が続けることが出来たのは彼女に幸いであつたに違いない。特に母は庭づくりが好きで、僅かばかりの庭園に諸種のバラや山吹、緋桃や、紅椿、山茶花、つつじ、沈丁花などを植え、丹精こめてこれらを手入れした。また紫陽花や菊、それにコスモス、水仙、玉すたれ、カンナ、雞頭それから私の名も知らない花までよく栽培していた。草取りから殺虫剤の散布、さらに施肥まで、さすが農家育ちとうなずかれるものがあつた。

半坪の園にガーベラ咲きて

つばくろ舞い来 吾子生れし日よ

四季小さな庭の草木にはほとんど花が絶えることがなかった。心ない者が時にそれらを盗むこともあるらしかった。母の花は家族の目を楽しませることよりも仏前に捧げるためのものようであつた。これから誰が代つて草木をいつくしみ、そして仏前に花をそなえるであろうか。今あるじの亡くなったのも知らぬげに、ダリヤの大輪が咲きかけようとしている。

七

母は純然たる農村の出身ではあつたが、薩摩の古い武家の氣風を保っていた。まず、徹底した男尊女卑の風習を身につけ、それを微塵も疑うところがなかった。或る時、なにかおかしな仕草をしているなと思つて聞いてみると、う

私達がうっかりして女用の物干ザオの下を通ろうものなら、穢れたとしてもう一度くぐりなおしをさせられた。お風呂なども女が一人は入ると最初から沸かしなおしをした。一寸滑稽味さえ帯びているが本人が大まじめなのだかなわらない。しかしこれもあながち意味のないことばかりではなさそうである。本来薩摩の国では、特に武家一族では男の子が生れると、親達もこれを「主君の征兵、殿様の従属」として育成する習わしがあつた。わが子に対してさえ敬語を使う根拠が見出されるわけである。しかもそれからの躰けはきわめて厳しいものがあつた。それらを最後まで守り通したのは恐らく母などの時代ぐらいで、その意味では母も最後の人と云えるであろう。

母から受けた言葉のなかに「人をただで使うな」というのがある。大学から公用の小使さんが来ても母はかならず謝礼をした。新聞、雑誌配達夫、それから郵便屋さんにも何かがしの心づけをしなければ気が落ちまないのである。ついで病氣の直前まで、戦時中の疎開先で水汲みの世話になつ

た一少年へお礼がしてなかったといって人探しをさせられたのには閉口した。また「損はしても得をするな」というのも彼女らしい口癖だった。

母は新聞などでも先に目を通し、私のために必要と思われる箇所には赤丸や、棒線をつけておいてくれた。大学の先生でも小学校をろくに出ない母からみて無学以下の存在であったし、そして何時までもわが子であったのである。

八

時折考えてみるのだが、女として人間として母の生涯は幸福なものであったろうかと。私の小さい時の記憶では、母の実家では五、六人の女中と四、五人の下男を使っていた。小作米の納入の日などは村のお祭りのような騒ぎであった。しかし母の父は学問をさせるとお転婆になるという誤まった考えから、彼女を学校へは出さず、三味線、琴、お茶、生花、小唄のようなもののお稽古を強制した。母の話によれば、祖父も小唄をひとつ歌えば、何処の田圃をくられるとか、三味線を一曲ひけば何処の山を与えるとか云ってそそのかしたそうだが、母はそれらに興味を覚えず、毬つきの遊戯や水泳などが好きであったという。十五、六才の頃鹿兒島市へ出て、或裁縫学校へ入学したのだが、すでにその頃自分の学問のなさを痛感し、父親を恨んだと言っていた。子供三人とも高等の教育を受けさせたのはこうし

た母の後悔にも原因しているように思われる。それにしても市内における学校生活は母にとって最も楽しい時代の一つではなかったかと推察される。母には少女時代からの許婚者があり、彼もまた当時同じ市内に遊学していたからである。二人は真実愛し合っていたことはその後の母の言動から充分子供ながらうかがえた。また今から考えてみても恰好な夫婦になれる可能性を持っていたように推察される。ところがほんの僅かの運命の悪戯が彼等の仲を裂いてしまった。彼等の両親がはしたない喧嘩をしてしまい、母の父が一方的にこの婚約を破ってしまったからである。母はやむなくわずか十八才の若さで一度も見たこともない隣村の一青年のもとに嫁にやられたのである。

父の家も相当な畑と山と家を持ち、私の覚えてる限りでも二隻の大きな帆船をもって遠く大阪との間に、商業を営んでいた。別かたくなな因習の中で止むなくその父なる命令に服従するほかはなかったが、純情一徹な性格の主は、成人的自覚がすすむにつれて実父を怨み、性格のあわない夫をうとんじ、ひたすら初恋の夢を追う結果となってしまう。

残っている。父と彼とは性格的にも人間的にも反対のよう
に思われた。そして母にとって父は彼を失わせた原因の
人となり、母の生涯の幸福をつもった人のようにも考え
られたらしい。長い夫婦生活の中で私は母が心からの愛情
を父に示したのをめったに見たことがない。そのうえ母の
家の方が父の方より何となしに上のように世間で取り扱わ
れていたらしく、母自身も無意識に父を劣等視するような
態度をとることがあった。父は才能に恵まれ、しかも忍耐
強い人であったが、それにも限界があった。子供等は何時
でも母の味方であり、夫婦喧嘩の時にはかならず父の敵と
なった。(『』私私の人生における失敗は多く父の言にそむ
いたところに起因するように思われる)。今から思えば父
が真に可愛想でならない。

父について失望した母はすべての希望と愛情を三人の子

供にかける運命となった。そしてその子供たちは……ひとり娘は東大出の英才に嫁したが子は無く世を去り、末子は医学部の教授になったが母に先立ち、長男はいつまでも面倒のかけどうしであった。結婚に恵まれず、子供たちにも縁薄かりし母に同情のほかはない。ただ病院のある日、長年月勤務した老付添婦は「幸福なお方でした」とつぶやいたとか。また某看護婦は「しっかりしたお婆ちゃんだった」と囁やかれたとか。

母の告別式は親鸞聖人の西大谷本廟において親類一同参集のもとにいとなまれた。ささやかながら生前の知友、近隣の善人、大学関係の方々が親しく参列され、多くの高僧たちの説経のなかに、しめやかにとり行なわれた。そしてお骨はこの御廟につらなる西大谷の川畑家の墓所に納められた。

九

私たち兄弟が医学を学ぶようになったのは全く母が医業を最高の道と考えたことによるものである。中学校の時の作文に「わが希望」という題があったが、そのとき母に満足を与えることが、我が唯一の希望である、と書いたことを記憶している。

そのかみのいとけなき日よたらちねの

母さえ病めば世をはかなみし

母の希望にそうべく、そして人生に意義を見出すために兄弟は、卒業の後は風光明媚な高原に自然療養所のようなものを建てることを理想とした。そこに病める者、悩める者、苦しめる者の友として社会に貢献しようとする計画をたてた。ところが卒業の真際になって恩師戸田正三先生は「治療よりも予防」「臨床よりも基礎」という錦の御旗をたてられた。私は全く思いもかけない世界へ飛び込んでしまった。内科臨床のかわりに公衆衛生学を専攻することになり

更に困ったことに弟までが臨床を放棄して基礎医学の道を歩むことになってしまった。学究への道がいかに峻しいか基礎への歩みが、いかに経済的に恵まれないものであるか、母は或る程度その間の事情について知っていた。ここに母が幾十年夢みた川畑兄弟病院建設の理想の灯は消えてしまったのである。それと共に母の川畑家復興の願いも空しい夢となってしまった。

しかしそれでも母は子供達の切なる希望であればと云って格別反対はしなかった。何と云って母を慰めてよいか、今も私は途方にくれる。母はもう国へ帰る顔はないものとおきらめたようであった。郷里に近い指宿温泉に神経痛の湯治に行った時にも、故郷に飯る顔がないといつて立ち寄らなかつた。私が国へ墓参に飯ると云つても恥さらしをしてくれるなど切願した。事実郷里では、川畑兄弟は大学へ行くようになってからぐれだし、医者にもなれず、衛生掃除をしているようなと噂さが流れていた。母はまた郷里から人が尋ねてくることを極度に恐れた。小丘一家のなれの果と思われるのがつらかつたに違いない。

父の事業が失敗してわが母の難儀と苦勞は、箱根八里を越え大井川を渡るような連続であった。私は大学の助手になつてから一年目、なにがしの孝養をしたいものと考え、母を別府の温泉にさそつたことがある。物心ついて母と二

も滑稽だと笑われたが私達にとつては大助かりであつた。

それに主治医の川台先生をはじめ看護婦達の治療と看護はただ有難いというほかはなかつた。なにかにつけて戲しくやかましい母ではあつたが、これらの人々の技術と熱誠の前にひたすら敬服し、小児のごとき温順な感謝の念をあらわしていた。実際お下げにして髪を両方に垂らしたときはどこか少女のような面影がひそんでいると看護婦さんばささやいた。母の顔はどちらかと云えば丸顔でひたいが広く目がどかんとくぼみ、鼻が高く豊かな黒髪がふさ／＼としていた。両の頬は死の日までほの紅に、かつての日の面影をとどめた。美人というような方では勿論ないが、どこかに風格というようなものがあるらしかつた。私達親子が歩いていけると名告る必要もないくらい似ているということであつたが、母の奇麗な口もとに対し私は父ゆずりのきたない唇をしているのが少年の頃から残念でならなかつた。子供たちの母への渴仰の一つの原因はこの母の品位に対するものであつたかも知れない。

入院してからも母はいぜん潔癖性でわが身の衰えを人々に見られることをきらつた。そのため病が重篤になつてもだれにも会おうといわなかつた。戸口まで来た見舞客に会うことも恐れた。ところが或る日突然孫の一人に会いたいと云いだした。彼は先にも述べたようにその夜のうちに東

人だけで遠い旅行をするのは或いは始めてであつたかも知れない、そして最後となつてしまつた。七月中旬の瀬戸内海は春風にさざ波がたち、去来する島々には緑の松が色濃かつた。時折かもめが甲板の上をかすめたのを記憶している。別府についても普通の旅館に悠々静養するわけではない(ほとんど一年間のサラリーを出したのに)。母が自炊をして我が子の好きな料理を調理するわけである。それでも母一人子一人の水入らずで、ささやかな温泉生活を三週間ばかりもつことができた。行きは二等、飯りは三等であつたこと~~も~~今でも忘れない。この時も母に心配をかけた。

十

今年も例年の通り私は夏休の大半を信州の寺院で送ることにした。私の健康のためによいといふので誰よりも母がこの逃避行を勧めるのである。出掛ける時母は元気で働ける喜びを私に語つた。ところが八月の末に母が支関先でころび、骨を折つたかも知れないという急報が電話でもたらされた。母は大したこともないから飯る必要はないと云つた。飯宅してみると母の衰弱は意外にはなほだしく、私は直ぐに大病院に再診察に連れていった。骨折のほかに旧結核が再発したと憂慮したからである。ところが病院は超満員でやつと特別のはからいで、結核研究所小児部にとまかく入れて貰つた。八十のお婆ちゃんが小児科だといふの

海道を自動車で飛ばしてやつて来た。彼女の喜びは大きいものように、それからどういふ心境の変化か親類縁者の病室に入ることを許した。

虫のしらせと云うか、これらの人々と心ゆくばかり静かな名残りを惜しんだ。病室はそれからいつも若い人達の囂困気が漂よい、母なりのユーモアを云うことさえあつた。ただ血縁としては米國に留学中の孫娘と郷里に心臓を病む実弟が間にあわなかつた。

完全看護というので最初のうちは外からの看護人を入れることをためらつたが、純粹な看護以外の用事がかなり多いので、私達は専門の付添婦を昼夜を分たずつけることとした。それでも心配なので身内の者の誰かが一人は片時も離れないようにすることを申し合せた。病院では私達のために特にベットを置いてくれたので私は母と枕を並べて休むことができた。深夜ふと目がさめたとき母がベットの上で寝ているのを見てなんとという有難いことだろうと胸をつまらせることもあつた。

たらちねは老いを健ややく生きたまふ
この新年のかたじけなさや

これは某年の元旦に詠んだ旧作であるが、何は無くとも母親のいますひそやかな喜びを味わつたものである。いまわずかに残された温かい慈愛の雰囲気の中になむる我身の

幸を感謝せずにはいられない。母よ、その生命よ、ただひとすじに長かれ。

十一

私は或る夜不思議な夢をみた。それは悲しくそしてまざまざとした夢であった。

とほとほと一人私が歩いて行くうちに次第に日は暮れて道は遠く荒野は果しがたない。そのうちに風が吹きしきり砂や木の葉を捲いて虚空に吠える。私は寒さと暗やみにおびえながらオーバーの襟を立ててつまずきがちな足を急がせる。そのうちに日はとつぷり暮れてあまつさえ沛然と驟雨が降つて来る。雨は上着をとおして肌身にしみ流れる。いまや歩く元気もなく、足はすくんでしまう。とうとうぬかるみの上にくずおれてしまった。助けを呼ぶ力もぬけて気を失ない、幾時かが過ぎたようである。やがてふと目を覚まし頭を上げて遙かな空を仰げば、かすかに残光が映えている。よく見ればそこには美しい七色の虹が半天にかがっているではないか。何という壮麗、私はふと両手をそろえて合掌する氣になつた。

その時さらによく見れば虹の一方のたもとに小さな人影が見える。後ろ向き、小さいく老婦人である。なんと母に似ていることか。私は思わず、あゝお母さん、と呼んでみた。

れることはない。喜んで娘のいるところへお参りさせていただく。いたずらに注射、薬で命をひき延ばしても自分も苦しいし、人にも迷惑をかける。安らかに眠らしてくれないか。

という。私はあわてて反射的にこれを否認した。しかしその後衰弱は加わる一方で、繰り返し母は

「もうこれ以上薬や注射を受けたくない」

と訴えた。そしてその都度私も同じような返答をした。

幾日か経つて、或る夜母はまた以前のようなことを云い出した。この時私はもう誤魔化しが効かないように思つたので、静かに母に言つた。

「ではお母さん先に妹や弟のところへお参りなさい。もうじき僕も行きますからね、待つてよ」

母はいかにも満足そうに深くうなずいた。

幾時間かが経つてからきまりの時間に看護婦さんが注射しに来た。母は私を静かに呼び寄せ

「それでは約束がちがいますよ、どうして静かにお参りさしてくれないの」

と悲しげに云う。私は看護婦さんに注射を断つたが、彼女は職務を怠ることが出来ないという。母はジツと眼を閉じてその注射を受けた。

翌朝また看護婦さんがお葉を持つて来たが、母は口を開

お母さん! というその声は大きな音の波となつて空いつばいに広がる。お母さん、お母さん! もう一度大きな声で呼んでみようとした。だが声がない。そのとき本当に目が覚めてしまった。しかし目を見開こうとしてもちよつと目があきにくい。不思議に思つて両手で目をこすれば、くぼんだ両眼に一杯涙がたまつていた。そしてかたわらのベッドを見やれば、我が現実の母は小さいくからだを、ベッドの上に横たえ、無限の愛情の眼をもつて私をじつとみつめていた。

十二

レントゲンなどの症状から入院したときすでに母の病状は絶望的といわれていた。それでも主治医をはじめ看護婦付添、身内の者の一致しての治療、看病などによつて一時は奇蹟がおこるのではないかと思われた。しかしそれは消える寸前にローソクがひととき燃えさかるような現象に過ぎなかつた。

母の容態は日に日に悪化し、人々の胸を憂愁でしめつけた。母はこうした折でも意識は極めて鮮明で感覚や思考も少しも衰えるところがないうであつた。私が一人いるとき、母は枕もとに近づくように云い

「このように衰弱していくのに恢復できるなど考えられない。私は仏様のお慈悲を戴いているので少しも死を恐

かなかつた。御飯をすゝめても口を開くことをしなかつた。お風頃のどが乾いていそうなので水を少しばかり上げようとしても口を開こうとしなかつた。この時、「これは生かす為のお水ではありません、のどの乾きをとめるんですよ」と云つたら小さな口を開いて少しばかりの水をおいしそうに飲んだ。それが母の地上における飲食の最後のものとなつた。酸素吸入や栄養剤、さらに飲食を断つた母はとみに危篤状態に陥り、やがて殞死の呼吸状態になつた。私が母の頬近くに口を寄せて「お母さん解る?」と小声で聞いたときかすかににつこりうなずいてみせた。それが親子の最後の問答となつた。

それから呼吸はとぎれがちとなりやがて痰がつまり遂に最後のいきが消えていつた。

静かな、静かな往生であつた。私の唱える念仏に母が声を揃えて和しているようにも思えた。母の唱える称名に私が従つたのかも知れない。

十三

一九六五年十月十七日午後二時二十分、母は永眠した。奇しくも先年物故した父と同じ満八十才であつた。病名は肺結核、心肺機能不全、肺化膿感染症で、癌への疑も十分あるということであつた。かねく健康診断や予防医学を唱えながら母に毎年人間ドックや精密検査を受けさせなか

つたのはなんとしても申しわけがない。大学病院の先生方に往診してもらつたり、或は入院を母がいやがつたりしたことなどはなんらその言いわけにならない。

それにしても母への診断と病状とは必ずしも一致しないものがあつた。たとえば、早くから両足に強い浮腫が現われたこと、それから右側を下にして眠ることが出来なかつたこと。さらに、時々以前から特有の発作的息切れをしたことなどである。

母の遺体が大学病院の聖安室に移されたとき、私の責任感はいかにして忠実に母の遺言を守るかということであつた。遺言は次のようなことにもふれていた。

「私の魂は如来様のもとに招かれていたので葬式をする必要はない。若しその費用があるなら孤児院に寄附するように。また格別死亡通知を出すにも及ばない、等々」である。

母の恥ずかしがりやと人見知りの本性を私は骨身にこたえるほど解っているのであるが、他面医学徒として母の遺体を医学に捧げ、いささかなりと、その向上進歩に役立たせることを考えだした。主治医の川合先生はせめて胸部だけの解剖を……と懇願された。遂に意を決して私は母の全身解剖をすることを許した。今や浄土にいます母の霊はその子の罪を許さないであろうか。聖安室から剖検室までの道

こうして輝いて、たそがれが今一がたに浄土へ輝いた、母の霊の光がたそがれに輝いた象徴にも思えて私はひとり宵闇のなかに立ちつくして罪を悔いた。

十四

生前、私の家で朝早くから夜遅くまで働いている母を見るにみかねた弟は時にこうも言ったものである。「何時までたつても兄は大きな坊やだね、そんなに苦勞ばかりかけるんなら僕が連れて行くよ……」と。實際考えてみれば、母には厄介の掛けつ放しであつた。弟が母を本当に安養浄土へ連れて行ったのにちがいない。母もお念仏の行者であつたから必ずや弥陀の本願の救済にあずかつて涅槃界にいたにちがいない。私は今こそ母のいます国が仏の国であり、仏の国に我が母いますと体感できる。念仏を称えればそこに母があり、母を憶えば念仏がとなえられる。母こそは私のためにすべてを捧げ尽くされた法蔵菩薩であり、私をいづくし育てた観音菩薩でもあつたように思われる。私は今まで滅多に親しく母に挨拶したことはなかつたが、往生のあとからは朝夕仏壇に向かつて静坐し、礼拝しないと気が済まない。母を通して仏の慈愛を思い、仏の救済を母の姿にうかがうことが出来る。

母を失つて私は今や親、姉妹のすべてをなくした。孤影悄然、秋風落莫の語感が身にしみる。万象流転、諸行無常と宣らす仏陀の教勅もほのかに分るような気がする。それ

すがら母の遺体をのせた車を私も主治医とともにひいた。たそがれの病院の垣根には、母の入院中匂いつづけた金木犀の花もいつしか散り果てていた。庭園のところどころにコスモスと菊の花が咲き残っているのを見た。母は香りや匂いに敏感で、私の小学校にいく前の頃から香の袋をつねに身につけていた。母の匂いはその香の匂いでもあつた。剖検室では母を解剖する間中は凝々と切開されるその遺体を見守っていた。

解剖の結果は大部分生前の診断の通りであつたが、かなり不審の点が明らかにされた。たとえば母の主な死因は心肺不全で、その第一の原因非淋菌は右肺病で、相当大きな塊状の腫瘍ができ、それが左肺、さらに脾臓、肝臓などにも転移していた。右肺の助膜には実に一リットルにも達する浸出液があり、そのためにいき苦しさを右を下にして寝られない原因もわかつた。また癌による静脈の圧迫のために足の浮腫が大であつたこともうなずかされた。母の屍体解剖によつてその他にも数多くの疑問や不明が解明され、主治医はもとより主任の内藤教授、病理の岡本教授からも深く感謝された。必ずや今後の治療に幾分の貢献をするであろう。母は死してなお自ら最も敬愛し信頼した医学のために自らを捧げ尽した。解剖を終えて外に出た時、西の空、愛宕山のうえには早や残照もなく一ツ星、金星がこう

でも母の慈言を通して仏説を聞き、弥陀の悲願を実母の恩愛に思うことができるのは、わが身の幸いといふべきであろう。三界の火宅と呼ばれるなかに尚しばらく瞋恚愛欲の情炎を燃やしながら生きるであろうが、私もまた母のいます国に必ずお参りすることができるであろう。「俱会一処」の仏説によつて。

一九六五年十月三十一日午前零時半過ぎ、紅葉散る信州上高地山荘にて。

弥陀ひとり、ひとり我

惠空 語録

仏の大悲を按ずるに、或は「猶慈父の一子を愛する如し」と説き、又「視ること自己の如し」と云えり。悲心切々にしてまた二人あることを見給わず、何ぞ緩漫としてゆるがせにせんや。又行者の仰信を明かすに弥陀に二仏をならべず。譬えば孝子の兄弟多くとも、親を姉妹に賦りあてて孝に分配なきが如し。初生より老後まで父は全く我父なり。我一人の父なれども又兄弟の父たることを妨げず、今もまた同じ、五劫の昔より十劫の今に至るまで弥陀は全く我弥陀なり、又衆生の所皈を妨げざるなり。譬えば人の月を見る者の多しとて月を碎きて人と我と分け見ず、一輪ながら皆己が詠めなり。故に弥陀ひとり我ひとり、此恩を垂れ、此恩を蒙るなり。

平等の大慈悲

花田正夫

「乏しきを憂えず、等しからざるを愁う」と昔から申しま
すように、我々の生活に平等に乏しいことがあれば協力し
て堪えて行けますが、一部の人が独占しているとすると爆
発するのが人情の常であります。

顧みれば人間の長い歴史に、この平等を求めることは実
に切々たるものがあります。リンカーンの奴隷解放、殖民
地の独立、人種差別の撤廃、労資の紛争、等々惨憺たる事
件のはてしない連続であります。これ皆悪差別を嫌う人々
の衷心からの動きであり願いであります。

然し単なる平等は我々生活の実態にそぐいません。悪差
別が非常な害毒を及ぼすように、悪平等もまた弊害をもた
らします。真実の平等心は、同時に秩序ある差別としてあ
らわれる、例えば五人の子供を持つ親が、子は平等に可愛
いからといって、長幼の別も、男女のわけ目もなく扱う者
はありません。真に平等に愛する故に、幼児には幼児らし
く、男子は男子らしく、平等愛はそのまま差別に即してあ

て、心の壁に塞ぎされた孤独の暗室に光の射す日とてありま
せん。

近角先生は『信仰余瀝』の最初の宗教的同朋の中に、そ
の心を懇切に述べていられます。要約しますと、

「相手が如何にへだて、そむき、冷くしても、それによ
ってこちらが砕けず、そういう人になお一層の慈悲心で
向って行くことが出来れば、相手は遂にそのまことに感
動して、その邪推を愧じてとけあうことが出来るであろ
う。これが善人の感化というものであるが、若し悪の力
が強ければ、相手の善心をも砕いて、遂には悪に落ちこ
ましてしまう。

さて我々の日常生活を省みる時、善に勝ち抜くことが出
来るかというに、それが出来ない。他人はいざ知らず私
自身は常に悪に負けてばかりいる。して見れば自分は相
手をも自分をも悪の方へ何時もおとし入れてばかりいる
のである」

と、へだて心のやまぬ身を表白していられます。

さて、このような苦海の沈淪が身の定めである私共に、
他の人々に何を求め得る資格があるでしょうか、身から出
た錆として業苦の無窮の連続の外はありません。この求め
る資格もなく、求めようもしない身に、呼びかけられる
よきひと親鸞聖人のみ声があります、

らわれ、これでこそ子供等はのび／＼と成長いたします。

平等のまんまが差別、差別のまんまが平等、二にして一、
一にして二、その円融無碍の心こそ、一切を安んぜしめ一
切を育成いたします。仏教では、平等に照らす智慧を慧眼
といい、差別を照らして、松は松、柳は柳と知る智慧を法
眼と云って、その二つの眼をまどかに成就した智慧を仏眼
と尊ばれます。和讃に、

平等心をうるるときを いっしち 一子地と名づけたり

一子地は仏性なり 安養にいたりて証すべし

とあります。平等心を得て、一切の衆生をわが一人子と
感ずるといふ智慧は、我々が浄土に往生し、成仏する暁に
はじめてあきらかに知見される境界であります。

省みて、私共の生活は一体どうでありましょうか。他に
平等心を求め、かつ我身への理解を求めながら、自分自身
は悪平等か、悪差別のどちらかの泥沼によこれて、その足
を何時までも洗うことが出来ません。そこに自他共にへだ

「弥陀の本願には老少善悪の人を選ばれず」

と。何という驚異の声でありましょうか。地上いたるところ、身近かには台所の隅から、広くは国際揚裡にいたるまで、人の住むところにはへだてと、さばきの寒風が吹きすさんで、身も心も凍てつくばかりであります。稀に立派な教があっても、ギリ／＼のところでは矢張り裁き捨てられるのであります。一切の呼び声が消え、誰一人として相手にしてもらえない身に、不可思議なみ声がきこえます、

「弥陀の本願には老少善悪の人を選ばれず」

と。何処々々までもおへだてのないまことのこころにふれ、身も心も凍りついた身を抱いて「寒いだろう!! 冷いだろう!! もう大丈夫だぞ!! 決してはなしはせぬぞ!!」との平等の大慈悲心に浴し、サザエのようにかたく閉ぢた心の扉もおのずとひらき、長夜の闇がひらかれます。

私はかつてユーゴウ作の「嗚呼無情」を読みました。福島先生もお話し下さったものであります。が、ジャンバルジャンの物語りであります。

幾度か破獄を企てた重大犯人と伝えられたジャンが刑期が満ちて出所しましたが、街中にその噂がひろがって、どの宿屋からも満員とか、予約済みとことわられ、どこの食堂も、売切れとか、営業済みと相手にされず、娑婆の風は

きびしいのであります。

日は暮れ、空腹と疲労の身を公園のベンチに横たえていと、人の好きそうな老婆が通りかゝり、「旅の人、起きなされ、うたた寝しては風邪をひきますよ」と呼びかけますと、ジャンは、物憂げに「銭がないんだよ」と投げすてるように答えます。すると財布をはたいて「宿賃の足しにない、ほんのすこしだがね」と老婆は渡しながら「これだけではね……」とつぶやきながら「あゝいいところがある。ホラあそこに門灯が見えるだろう、あそこならきつと泊めて下さるよ」と教えました。老婆の銭をだましとったジャンは「世間の奴が冷いんだ、俺も冷たくしてやるんだ、かまうことはない」とホクソク笑みながら「ありがと」と口さきだけの礼を云った。

夜は更ける、飢えと寒さが迫るにつけて、どうせ駄目にきまつているが、もしやと思つて、ジャンはその門灯の家をたずねて門に立った。そこに白髪慈眼のミリエル僧上があらわれ「何か御用かね」ときかれる。ジャンは「旅の者ですが、金も宿も食物もありません、どうか一片の残パンと馬小舎の隅にでも一夜の宿を……」とお願ひすると、者僧上は「サアお入り、ここはあなたの家です。宿も食もない者のための」と両手をのべられました。

ジャンは驚いたが、この人の好きそうな老人も、俺の正ゲしく、凍りついた私も、このお心に触れましたは、驚きとよろこびのあまり「ありがとうございます」と申すばかりで、他の言葉もありません。ジャンバルジャンが光の家に引き入れられたように。

然し私の日々の生活は、文字通りやりそこないの連続であります。われと我身にあきれはてるばかりであります。幸にも、近角常音先生が、常観先生から聞きとられました実語、

「やりそこない、またやりそこない、それだからお呆れないお慈悲でないか」とお教え頂き、やりそこないのやまぬにつけても、いよ／＼大悲の深重さを渴仰申すばかりであります。

池山先生はかつて「さるべき業縁の催せばいかなる振舞いもすべしとこそ、かねて聖人は仰せ候いき」の歎異抄の一文を引かれまして、「内に八万四千の煩惱を具足する身には、外にあらわれる縁次第でどんな業さらしをしてくすかわかったものではない、罪悪の免疫性はないのだから。しかし、いかなる振舞いもすべし、と仰せ下さる方、聖人お一人は、いかなる業さらしの身にも寄りそうて下さるお方である」と随喜していられました。

木に火がつくと、木のあろう限り火が焼きつくすように

体を知ったらサゾ仰天するだろうと予想しながらも、つい「実は私は今朝ほど出獄したばかりのジャン……」と語るうとしますと、僧上は手を振って

「是処へ来る人には過去を問いません、宿るに家なく、食うにパンのない人のための家です」

と微笑してあなたかく迎えられました。

この時、さすがのジャンも、生れて初めて人の心のまこととふれて、眼頭のあつくなるのを覚えて「ありがとうございませう」と頭を下げました。その後色々の迷いを繰り返しますが、ジャンの最後の日は、僧上から戴いた銀の燭台にローソクの灯を点じて、静かに合掌しながらその生涯を閉じるのであります。

私はこの本を読んで非常に感激しました。けれどもその下から、これは所謂小説で、こんな僧上なんか地上に存在するはずがないと思ひ捨てておりました。

ところが、驚いたことには、その僧上の実存の姿を親鸞聖人に見出しました。僧上が指す「光の家」に等しく、聖人の教えて下さる弥陀仏の家は、老少善悪の身を問いたまうこともなく、宿なく、パンの無い者、罪悪深重、煩惱熾盛の、三界孤独の地獄をさためとする私に「サア、おはいり」とお迎え下さるのであります。

自らもへだて、人からもへだてられて、身も心もトゲト

罪業の木のあるところ、何処々々までも大悲の火は焼きつくして下さるので、その火にもれる木は一つもないのであります。

老少善悪の人をえらばれぬ弥陀仏の平等の大悲心は、煩惱具足の身の常として、老人には老苦、若人には若き日の悩み、善人には善人の愁い、悪人には悪人の苦があると一切の差別相をも知ろし召されて、一一の差別相に即応して同喜同悲下さる廣大無辺の撰取の御手のたのもしさを常に渴仰申すばかりであります。南無阿弥陀仏。

師走の風をきき乍ら

一期一会

井伊直弼

たとい幾たび、同じ主客の茶会を催すとも、会を終えて別れるときは、しみじみと名残りを惜しみ、客を送って席にもどっては、ひとり炉辺に端坐して、寂莫の境地に入れ



あとがき

年の瀬が迫りました、お忙しいことと存じます。

「人間鬼々として衆務をいとなみ、年命の日夜に去るを覚えず。灯の風中に滅する期し難きが如し」

の善導大師のお言葉がことに身にしみま

す。
近角先生の御忌月であります。今度の「横着心と遠慮心」の御文は、律法と放縦にかたより易い異議の禍根を指適して、そこに引接の御手を延べて下さいました。

福島先生の道徳と宗教の関連を東西の両聖、ルーテルと親鸞の上に述べて下さいました、簡結なお言葉の中に深い教を蒙るところであります。

川畑愛義さんはすでに度々原稿を頂きました。ことに三重医大の愛浩(御令弟)さんの亡くなられた時の感銘深い信味は記憶にあらたなものがあります。このたび御老母とのお別れを期に、母と子との切々たる

真情を吐露して下さいました。嗚呼、むつびしたしみ、慕いしたわれる身も無常の嵐の前に紅葉のように散らねばなりません。「恩愛はなはだ絶ちがたく、生死はなはだつきがたし」と呼びかけて下さる大悲、「苦悩の有情を捨て給わぬ」御誓いなくば、永遠に光なき迷路にさすろうばかりであります。逝くも、見送るも、大悲一つに安んじて名残りを惜しまれる御体験であります。

先日盲の女の子の詩

ワタシハ 人間ガキライダ

人間以外ノ動物ト遊ビタイ

動物ハメクララヘダテナイカラ……

をテレビで聞きました。良寛さんの歌にも如何なるが苦しきものと問うならば人をへだつる心とこたえよ

とあります。然し、相対差別心しかない私共には、いたるところに壁を作り、柵をめぐらし、師走の寒風にさらされてくらさねばならぬのに、ここに「慈眼衆生をみそなわし、平等にして一子の如し」と大悲一つは、太陽が月や星や地球に光と温かみを放つように、人々の心の闇を破り、煩惱の氷

塊をとろかして下さいるのであります。「平等の大慈悲」はその德音の一端を述べさせていただきます。

「灯火の用意かしこし歳の暮」

御案内

○一道会例会。二月二日、九日、十六日、午後一時半。

市電、新郊通り一丁目下車、東へ一丁半

○教西寺、法話会。毎月二十四日、午前午後。昭和区小桜町 市電、御器所通り下車、桜花学園東側。

○このたび電話を引きました。

名古屋八二一局七〇三七番であります。

御利用下さい。

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番